

◆ 今週のコメント

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あり、本年6例目となっています。患者は40歳代男性で、型別はO86(VT1)です。
- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は、0.49(33例)となり、先週に比べ半減しています。今週より、発生状況の概況グラフの「インフルエンザの推移」は、「腸管出血性大腸菌感染症の推移」に変更しました。
- ・ ヘルパンギーナの定点当たり報告数は0.43(17例)で、第20週に比べて増加しています。過去5年平均値(0.33)を上回っており、夏季の流行ピークに向けて患者数の増加が懸念されます。年齢階級別では、すべて5歳以下で、1歳が6例(35.3%)で、最も多くなっています。

◆ 今週のトピックス: <突発性発しん>

突発性発しんの定点当たり報告数は、0.60(24例)で、過去5年平均値を2週連続で大きく上回っています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 6例】
- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例(第19週追加分)【1月以降の累積報告数 6例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.49	33
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	4.98	199
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.98	39
	③ 水痘	0.90	36
	④ 突発性発しん	0.60	24
	⑤ ヘルパンギーナ	0.43	17
眼科	流行性角結膜炎	1.10	11

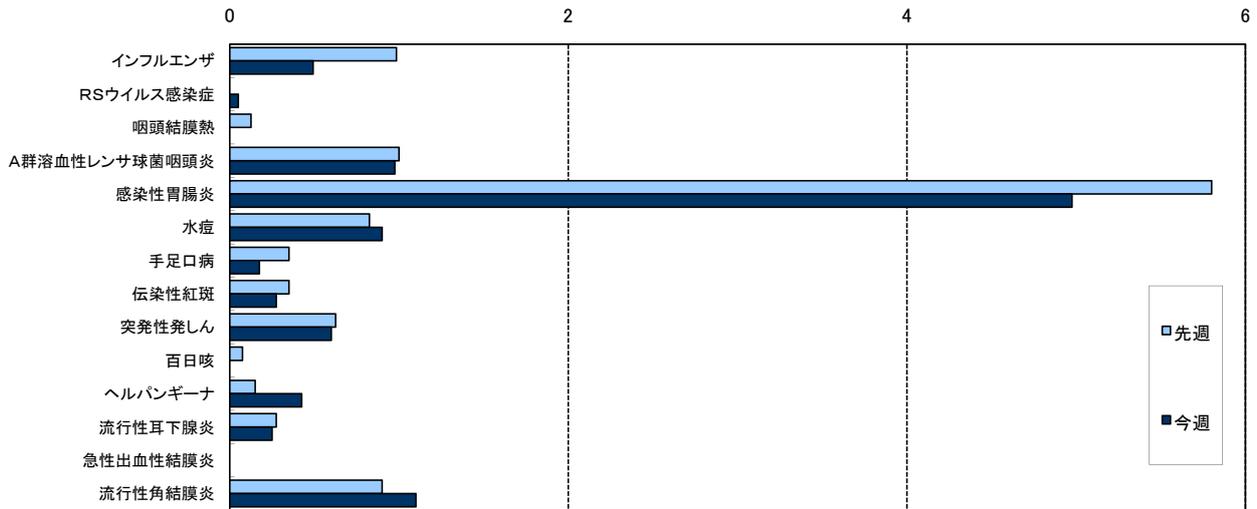
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <突発性発しん>

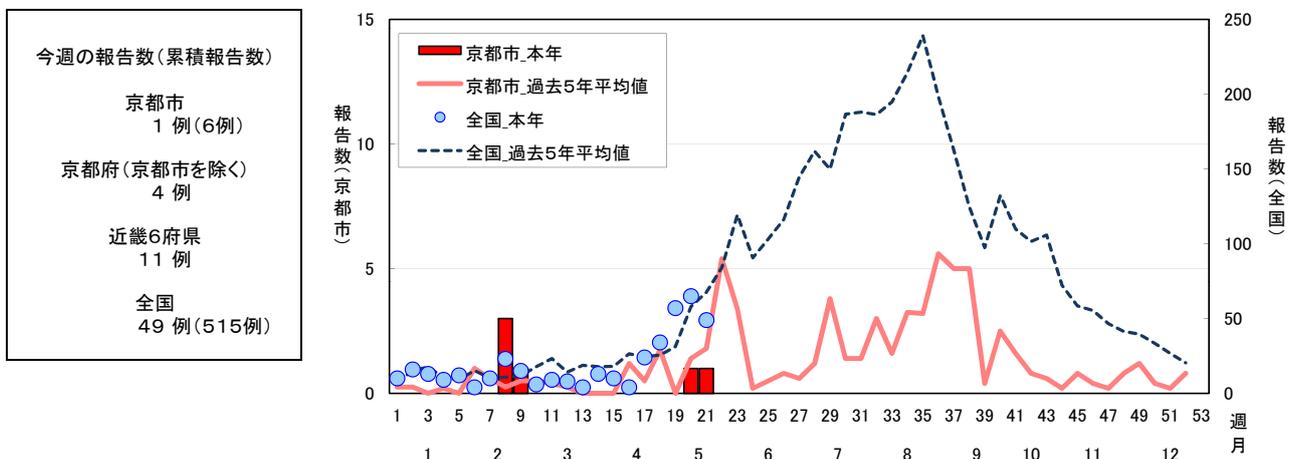
(注) 京都市のデータは、平成23年6月2日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第21週)と先週(第20週)の定点当たり報告数の比較

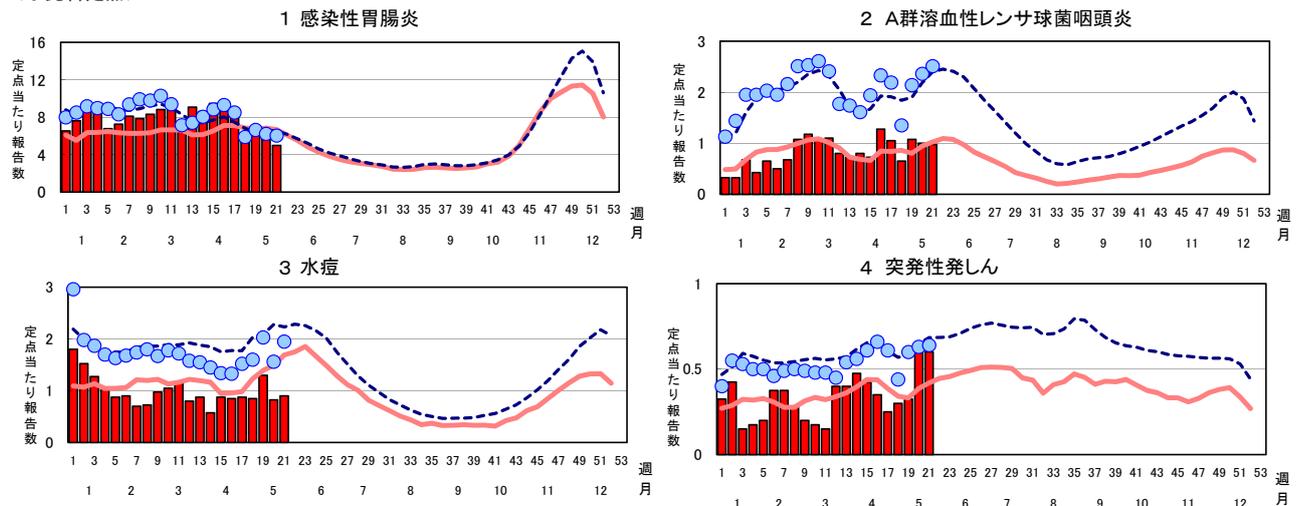


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

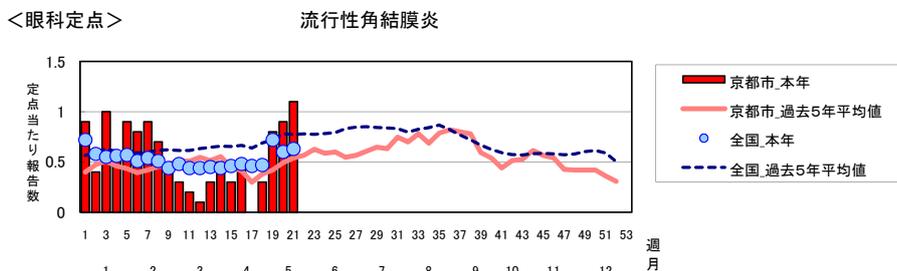


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



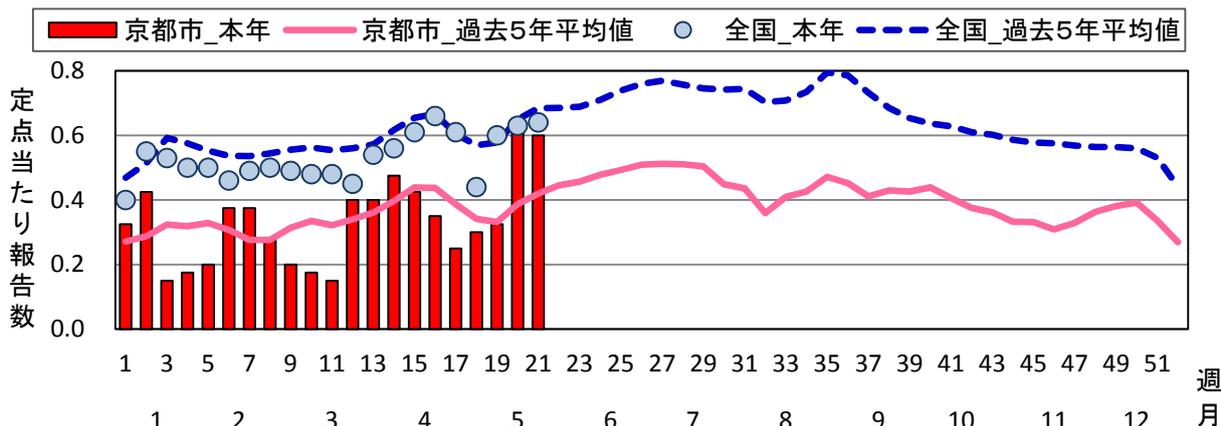
第21週(5月23日～5月29日)トピックス: <突発性発しん>

定点当たり報告数は0.60(24例)で、過去5年平均値を2週連続で大きく上回っています。
 年齢階級別では、6～11箇月が11例(45.8%)、1歳が8例(33.3%)で、1歳以下が79.2%を占めています。

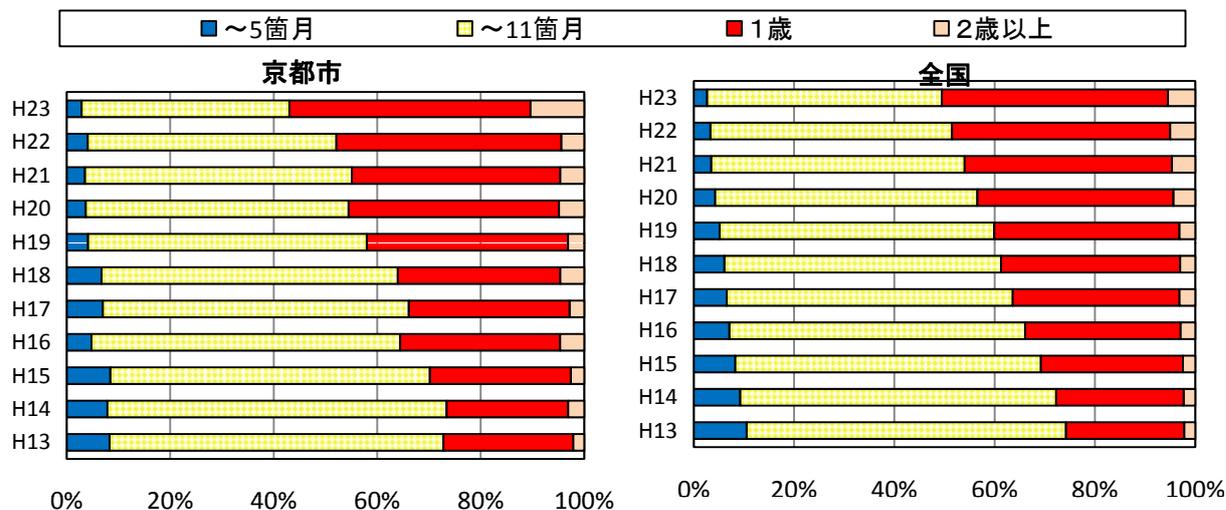
平成13年から年齢階級別定点当たり報告数の推移をみると、京都市、全国ともに、1歳の占める割合が増加しています。

行政区別にみると、南区、西京区で、多くの報告があります。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移(平成13年～平成23年第21週まで)



行政区別定点当たり報告数の推移

